

## Ⅱ Cha Yong-Suk 漢陽大学校教授（韓国）の短期 招請について

法学部教授 菊 田 幸 一

車教授は韓国における刑事法学者として第一人者であり、司法試験委員であるとともに同国の刑法改正委員として重要な役割を演ずるとともに、韓国死刑廃止協議会の理事をつとめるなど幅ひろい活躍で知られる。

同教授はアメリカで修士・博士号を取得され、数度にわたりアメリカ各地の大学で客員教授として滞在されており、同教授が来日された直前の一年間（1990年）はカリフォルニア大学で交換教授として滞在されていた。

同教授がとくにペンシルバニア大学で修士号を取得されるについては世界的に著名な犯罪学者 Wolfgang 教授の指導をうけられ、犯罪社会学の分野においても最先端の関心をもちつづけられている。その教授を招請することは私としても長年の交友との関係もあり念願としていたところである。

今回の招請期間中はその講義の一部を刑事訴訟法にも当てられたが、私の関心ある犯罪学の分野においては別に報告している通り、莫大な論文をもとに2回に分けて長時間の講義を拝聴することができた。あまりにも大部に至るため報告書においてはその一部の要旨のみを収録するにとどめざるを得なかったが機会をみて改めて全体像を報告する計画もある。

同教授が来日されて、われわれに大きな教示を与えてくれたのは韓国、日本およびアメリカという三カ国の犯罪現象について基礎的な実録を詳細に分析し、さらに、それにもとづいて犯罪社会学の、とくにアメリカにおける最新の仮説をたんねんに追跡しながら結論を導くという手法を示されたことにある。その仮説は生物学的、精神・心理学的、社会学的、多方面にわたるものであるが、とくに社会学的仮説について同教授は副次文化理論をもちだし、その解明にせまろうとした。しかし同仮説はアメリカの現代社会を背景として生まれたものであって、必ずしもわが国や韓国という、いわば単一民族の

生活における犯罪現象とあてはまるものではないことも十分に理解されての論議であった。

教授は各種の犯罪を通じての予防・処置対策に言及し独自の見解を開陳された。私見では必ずしも説得力あるものとは考えられない面もあるが、日本および韓国における社会的背景とくに民族意識の背景の相違からくるものと受けとめられる。しかし、単にそのような範疇で是否を結論づけてしまうのではなく、いわば人類共通の課題としての犯罪問題について、人間社会のあり方を前提とし、あるべき方策とは何かについて、まさに国際的共同研究の必要性が痛感させられたといえる。

これを機に、わが国における犯罪学研究の成果をもとに諸国とのさらなる比較研究の必要性がいっそう求められる。その一つの契機を与えてくれたものとして今回の本学における講義を評価し位置づけたいと考えている。

以上